
◎議案第20号の上程、説明

○議長（藤井 要君） 日程第7、議案第20号 令和3年度松崎町営宿泊施設「伊豆まつぎ荘」事業会計予算についての件を議題といたします。

議案の朗読は省略して、提出者から提案理由の説明を求めます。

○町長（長嶋精一君） 議案第20号 令和3年度松崎町営宿泊施設「伊豆まつぎ荘」事業会計予算についてでございます。

詳細は担当課長より申し上げます。

（企画観光課長 深澤準弥君 提案理由説明）

○議長（藤井 要君） 以上で提案理由の説明を終わります。

○議長（藤井 要君） これより、質疑に入ります。

質疑を許します。

○7番（高柳高樋君） 16ページですけど、収入のところでは事業収益が宿泊の利用率43%で21,300人で見えておりますけれど、前年度当初21,800人で500人位落としてるんですけど、最終的には10,100人位しかいなかったと・・・前年度は特に・・・令和2年っていうのは厳しいとは思いますが、令和3年に相当戻ること期待されて作られたと思うんですが、まだ未だに厳しい状態になってると思います。その辺りで、現在のその状況ってのはどのようなもの何でしょうか。

あの、予約状況ですね。

○企画観光課長（深澤準弥君） 2月ひと月コロナの影響で休みをいただきまして、3月1日から営業再開ということになっております。3月1日におきましては、やはり10組程度の宿泊でございましたが、2日については全部で30人を超える予約者がおりまして、少しちょっと期待をしたところですが、その後またパラパラ減っております。今回の3月7日までの緊急事態宣言が延長された事によって、少しまた動きが出てくるはずがちょっとはしごを外されたような形にはなっておりますが、昨日もちょっと説明させていただいたんですが、県内の観光の施策が動き出しましたので、月曜日からですねGOTOイートの再販も始まりまして、バイふじのくに・・・バイ静岡ですね・・・の関係で、予約を昨日、月曜日から県内の旅行について1組5,000円の助成をするという旅行も動き出しました。その中で・・・、それが50,000泊分くらいだったと思うんです。それ以降

も OTA による・・・いわゆるじゃらんとかそういった観光業の所を使った予約も 3 月の 22 日以降から始まるということで、県内は県知事も申し上げてる通りそろりと復調・・・旅行を促すといったことを始めてますので、県内の旅行者の動きがそろそろ出始めているっていうのはちょっと伺っていますので、そのやはり期待をしたいと思っております。伊東市が GOTO 伊東っていう事業で、5,000 円のものをやった時に即日完売したそうですので、まそれも県内旅行者に限るでやったので、そういう意味では少しずつですけどもそういった復調の兆しと、ちょうど良い春の桜の季節に向けて徐々にですが動き始めるといった期待を今してございます。

○7 番（高柳高樋君） 民間の場合は、国の方で収入を補填するというようなことがある訳ですけども、まつぎ荘の場合は公営ということでそういった期待はされませんので・・・これは民間と違って公営の場合は自前のところで補填しなさい・・・できるでしようっていうのが考え方だと思います。そういう意味では一般会計の方から赤字見てやるって事になる訳ですけど、もう一つはこれ結構頑張った数字じゃないかという風に見える訳ですよ、お客さん来ていただくと職員のモチベーション上がっていくんですけども、お客さん来ていただかないとどうしてもモチベーションが上がらなくなってしまふということになりますので、その辺り頑張りどころで職員のモチベーションが下がらない用に是非頑張ってくださいと思います。よろしくお願いします。

○議長（藤井 要君） 他に・・・。

○5 番（深澤 守君） 町長にお聞きしたいんですけど、毎年まつぎ荘って売上げの予算を 3 億円あまり・・・以上ですね・・・3 億 5,6 千万、実質売上が 2 億何千万位しかないと、すごく売上げと予算総額ってのが離れている、これ民間だとか言う立て方って多分しないですよ。ある人に聞いたら、これ努力目標だから・・・この離れても問題ないって話です。ある程度近い数字で立てて、月何パーセントとか月いくらとか売上を立てて、それを目標に向かって達成できる金額で予算を組んでいった方が良いと思うんですけど、今後こういう予算の立て方を続けていくおつもりですか、それともある程度前年度の売上げの何パーセント上乗せして売上げ目標を達成できる金額に予算を組んでくのかその辺の方針をお伺いいたします。

○町長（長嶋精一君） おっしゃるとおりで、努力するのは可能な売上げということが一番望ましい訳であります。今回の来期の予算については、比較的今までのようにですね

楽観的でもないんですけれども、今までの修正じゃないんですけれどもちょっと強気にねやってきたっていう経緯もあると思いますけれども、今期はそれについて実態に即したよう予算になっているなあという風に思います。あのあくまでも予算というのは達成可能なものでないと、職員も全体的にやる気を失いますからね、そういう意味での今回の場合は絞った予算になっていると思います。平成18年にまつぎ荘はオープンした訳ですけれども、借入金で10億・10億の借入金をしてスタートしました。そうして、去年コロナ前まででそれがやっと4億まで減ってきたんですね・四捨五入すると4億。しかし、これでいけるんだと思った矢先にコロナが発生したということで、非常に残念だったんですけれども・それはそれとして、みなさん方に前に言いましたけれども企業経営においてはキャッシュが大事なんです、だもんでそれで1億円を借りさせてもらったんですけれども、それにみなさんが快諾していただいたっていうことは、本当に感謝しております。これもまだコロナが治った訳じゃありませんので、まだまだ安心はできませんけども今課長の方から話がありましたように若干明るい兆しも出ております。松崎町としても3,000円の優待券もやっていますしね、これでこれらを活用すればなんとかいけるんじゃないかと思っておりますけれども、またまた何かあるとかわかりません。今キャッシュはこの予定で行くと4,000ちょっとですから、これもまた心配であります。そのときには、またみなさんのご支援をお願いしたいと思います。やはりこれ支援していくことによってまつぎ荘はこの町の代表的な宿舎になりますから、是非ご支援をお願いしたいなあとみなさま方に切にお願いいたします。以上です。

○議長（藤井 要君） 他に・・・。

○5番（深澤 守君） 町長今の発言、ちょっと認識違います。あのコロナ前の2年前町長が就任したとき2年間、初年度は確か50万くらい次がもう少し赤字出しています。その前は黒字出してた訳ですから・・・

（○町長（長嶋精一君） いや、そんな黒字出してないよ。ずっと赤字だよ。）

○議長（藤井 要君） 町長**違います・・・。ちゃんと質問は質問で、答弁は答弁で・・・

○5番（深澤 守君） やはり赤字とか売上げが落ちてくるってのは、何か原因がある訳ですよ。その中で今コロナ・・・この前も質問しましたけどやはり今改革とか、もう一度見直さなきゃいけない訳ですよ。もともと振興公社ってのは、松崎の振興を計るた

め、産業を興すために振興公社ってのは作ってある訳ですから、このコロナ禍ですね来年度に向かってそのまつぎ荘のどのようなアイデンティティっていうのか・・・そう考えたのか。振興公社のあり方ってのをどのように考えたっていうのか・・・改革案みたいなのを考えたのか教えていただけますか。

○町長（長嶋精一君） 確かにどんな組織でも個人でも、アイデンティティってものを持っていないとマズいと思います。それに基づいてね、前にも言いましたけれどもお客様が求めているのは・・・宿に求めているのは、あるいは地域に求めているのは、やはり対応・・・気持ちの良い対応をするのかどうかということだと思うんですね。そして、それについては前に回答しました。休みの間に徹底的に接遇の訓練をいたしました。そして、もう一つ目が、地元の食材を提供するというごさいます。地元の食材を食べたいということで、料理の新メニューの開発等をやっております。そういうことをやりながら、進めている訳ですけども、それからもう一つはさっきの温泉の話になりますけれども、良い温泉があるというこの3つがですね、おもてなしと料理と温泉、これが一つの大きな・・・あそこにもう一度行きたいと言うインセンティブになるということをよく言われております。ですから、まつぎ荘というのは松崎の代表なんだと・・・威張っちゃいけませんけど、そういう誇りを持ちながらねアイデンティティを高めていくということはやって参りたいと思っております。そして、あくまでも売上と経費ということを渡辺議員もおっしゃいましたけれども、確かにその通りで私の考えは絶対額で売り上げは捉えると・・・もちろんですが、絶対額を・・・売上げを増やすと、経費はパーセントで押さえていくと・・・売上げ対比何パーセントっていうことをね・・・それは、すべてそのがっちりとしたことはできませんけれども極力そういう風な形でやっていかないと最終的な利益は中々出にくいということと、キャッシュにおいても足らなくなるとがあるもんですから、そこら辺はある程度緩やかな・・・今こういう時代ですから、ギスギスになるとマズいですからね。ただそういうことを原理原則にやって参りたいと思っております。

○5番（深澤 守君） 少し視点を変えて質問させていただきます。あの先ごろ土肥の方に、古民家を利用したイタリアレストランができました。あれフランス式にいいますと、オーベルジュっていう料理と宿泊が一体となった宿泊施設っていうか料理屋だと思えます。フランスっていうところは、各地域によって料理に特色がありましてオーベル

ジュをやるところってのは野菜等を作ったりしてですね、特色のある料理を作っているのがフランス料理の特色ではないかと思っています。今問題になるのは、結局野菜を作っても売れない、で片っ方では作って欲しいっていても作ってくれないっていう・・・鶏が先か卵が先かの理論見たいのがあって、中々新規就農も農業が発展してかないってのがあるんですね。一つ提案なんですけど、これやれるかどうかわかんないですよ、もしまつぎ荘がですねその年間のメニューを組んでいただいて、その中で例えば夏はにんじんが欲しいとかタマネギが欲しいとかっていうものを出していただいて、それを集団的なもので計画的に作っていただくっていうこともやりようによってはやれるんじゃないかなと・・・それが逆に言うと生産者は、買ってくれるところがある。逆にまつぎ荘は作ってくれるから、そういうものを使って松崎の特徴的な料理ができるっていうような相乗効果が生まれると思うんですけれども、いかがでしょうかそういう考えもできると思うんですけれども町長の見解をお伺いいたします。

○町長（長嶋精一君） 非常に良い考え方だと思います。あのお互いがそれで高め合っていくと、需要と供給が一致してくれば一番良い訳でありまして、ただ計画というのは非常に狂いやすいものですからね、そうなった場合どうするかっていうのも考えながらただし今の考えっていうのは、良いと思います。農業に限らず漁業も・・・魚とかそういうものについても直接仕入れをするというようなことは非常に良いんじゃないかと思います。以上です。

○議長（藤井 要君） 他に・・・。

○1番（田中道源君） ちょっと2点ほど確認させていただきたいなあとと思います。3月・・・今営業再開されていると思うんですが、休館中に研修等するという話をされて他かなあとと思ひまして、どんな研修されたのかっての確認です。そして、いまの3月、4月の予約状況というんでしょうか、どのくらいの予約がされてるのかっていうのをわかる範囲で教えていただけますか。

○企画観光課長（深澤準弥君） まず一つ目の質問です。休館中にやっていたことは、まず最初に物理的なものについてはマスクを作って地域に還元をしたり、棚田の方の作業に手伝いに行ったり、後はまつぎ荘の周りを管理を少ししてもらったりしています。もう一つ研修という部分につきましては、まだこちらにまでは報告が来ていないんですけれども、中でやっていたのは各部署ですね、事務所、応接部門、調理場部門の3つが

実はございまして、そこの部門ごとにまつぎ荘のいわゆる「どうなったら良いか」という共通のテーマを与えまして、まずは部門ごとにその考えを出させると・・・あらためてもう一度今自分たちがやっていることがどういった形で目標にむかって還元できるかっていうことを各自で考えていただくって事を宿題で渡していたのがまず研修です。

今度それが上がってきたときに、部門ごとの連携のあり方をしていくということテーマとして出しております。それはなぜかといいますと、なかなか満館の時とそうでないときで人の雇用の数とか配置の部分でどうしても足りない日とかが出たときに、事務所が事務所の仕事だけするというようなことで果たしてそれでいいのかといったことを各部門ごとに考えていただくといったことを研修の材料として出しております。そうすることによって、1人が一つの仕事ではなく他業種的なことを補完しながら、少ない中でやれることによってより一層応接は応接でお客様に対する少しは余裕ができるんじゃないかといったこともございますので、そういったものを出して考えを出してくれということで研修をするようにして事ではなっています。まだこちらまで報告は来ていないですけども、確実にそれをやったという事実は報告は受けておりますので、その結果を見ながらまたいろんな形で再度・・・今度は営業しながらですけども進めて行きたいと思っております。これでいいという答えが接客業務無いもんですから、どこまでというか相手もあるものですのでしっかりとやっていきたいということを伝えてございます。今あのちょっと手元に予約状況の数字まだ来てないんですけども、最近の予約の動向を見ますと、特にこの非常事態宣言がでてからというもの近隣の予約っていうんですか・・・3日前とか1週間前とかそういうので突然入る予約がございまして。最近この3月多いのが1人でふらっときていう予約もパラパラとでてきているということで伺っておりますので、後でまた現在の予約の状況っていうのは出せますけれども、あまり今の状況ですと予約自体は芳しくないけれども近くなると数字が上がってくるというのが実際コロナ禍においては最近多い状況でございます。

○1番（田中道源君） はい、お答えいただきました。あの・・・ちょっと違う質問をさせていただきたいと思っております。研修はいい課題を出してもらってしっかりと話ししてもらえたら次につながるんだろうなと思っておりますので、ぜひその成果ってのをあげてもらってですね、しっかりと検討して欲しいなと思っています。その違う質問なんですけど、今皆さんもご存知の通り隣の町ですね、クラスターが出まして・・・その際にある旅館で受入

れをしている・・・でD-MATであったりとか、いろんな助けが来ている中である旅館さんがそれを受け入れたってということもあるんですけども、松崎町で同じような事態が起こった場合ですけれども、このまつぎ荘で同じような対応を取るような可能性ってのはありますか。

○企画観光課長（深澤準弥君） 西伊豆の話いろいろ伺っております、私どもでもし万が一といった場合については、いま考えて・・・今まで患者さんの考えていたのでそういう場合は1人2人だったら中瀬邸の駐車場の所にある町が持つてる建物とか、いわゆる山田邸とかそういったところを考えていたところですが、今回みたいなケースで町内でいわゆる感染者でない方の隔離をしなければならないっていったところのケースについては、やはりどこかが対応しなければならないんですけれども、今現状で考えられるのは多分今言ったような形で行くと民間の施設が中々やりにくいんじゃないかというところで、万が一の時には振興公社の方でまつぎ荘の方をとということも・・・例えばフロアを隔離したりっていうのは考える必要が出てくるかもしれないってのは一度中でも・・・振興公社の内部でも話をしたりはしました。ただこれがあの・・・はっきりと今こうしますって形で申し上げられないのはちょっと心苦しいですけれども、できるだけそういったことで考えたときには対応したいと考えております。実際に隣町の老健施設ででたときに、いまいった受入れをしたホテル2棟なんですけれども・・・2カ所が受入れをしてその間・・・今回もまた一人パラパラ出たもんで延長して契約しているそうです。ですのでその辺でも色々対応できないかなというのは、考える余地はあると思っております。隣で一番困っていたのは、食事の関係なんかもありまして地元の西伊豆の飲食店さんが風評被害に遭いたくないということで、弁当断ったりしたということも伺っております、うちの企画の方にも相談が来たもんですから町内の・・・松崎町内の業者さんにちょっと何社かお願いして実際にその風評の恐れもあるよというような話もしたところ、でも困ってるから・・・ということで快く受けてくれた業者さんも何社かあるということで、そういう意味でいろいろ準備しておかなければいけないかなと思っておりますが、今ははっきりと申し上げることはできない状況でございます。

○1番（田中道源君） 今回の西伊豆の例っていいますとクラスターということで、ちょっと規模としては大きかったのかなあと思うんですが、えーと・・・施設の内容としても松崎でも十二分に起こりえる話かと思っております。その時に国の方から助けが来てく

れると 30 人 40 人をいわゆる隔離しなくちゃいけないような場所っていうのが、当町においてはおそらくまつぎ荘しかないんだろなあと思います。ですので、その想定というんでしょうか、これ危機管理の部分になりますけれども、当然そこで受け入れるとなればおそらく他のお客さんを受け入れるって事は無理だと思います。ですので、その想定はしといた方がいいんだろなあと思いました。先ほど風評の話があったものですから、実は私が聞いてたのは今の話とちょっと違ってまして、松崎の方が逆にヤダっていわれたって風に聞いてたんです。ただこれ風評ですから、どっちが正しいのかでも事実として松崎の業者さんが渡してたとする、多分私の方が間違った風評を聞いてたんだと思うんですけどね・・・。同じように風評として西伊豆で今回こういうことが起きた時に、まつぎ荘に打診したとだけでもまつぎ荘の方で断られたという風に聞きました。まあそれは風評であればそれはそれだし、断ったなら断った理由ってのがあると思いますし、もしそこで断っててじゃあ松崎の方で出た場合どういう対応するのかなって思ったものですからもしこの今回の例上げさせていただいたんですけども、一応もしその辺の分かる範囲で結構ですから事実確認ができれば教えていただけますか。

○企画観光課長（深澤準弥君） ありがとうございます。振興公社の方からやはり今言ったようなことで相談がありました。西伊豆町から受入れをしてくれないかということで振興公社にあって、振興公社の方の事務局長から私の方に話がありました。まず最初に地元で受け入れるホテルさんがもし無い場合については、こちらでまた検討しなければならぬけれども地元で受け入れるところがあるのであれば・・・その当時地元のホテルみんな休館してたんですね。休館のところ受け入れた場合、1人1万円という形で連泊分町の方ですべて保証するという形になったもんですから、まずは地元のホテルの方で確認をしていただいた上でどうしてもいないということであれば、こちらで再度検討する必要があるだろうということで振興公社の方には話を申し伝えました。でその後某ホテル二つが受入れを表明したということで西伊豆の方からも連絡がありましたけれども、今言ったような松崎に断られたというような風評も実は入ってまして、老健施設の管理しているもとの方の医療法人の方の方からそんな話を伺ったんで、いやいや実はこうですよという話はさせていただきました。弁当についても実際に納品をしているということでしたので、直接うちで斡旋というよりかは何社に聞いて受け入れてくれるよということで、最終的に弁当屋さん決めたのはNPOでそういった支援をしてくれている団

体がありましてそこが直接連絡して納品を頼んだということで・・・、4社かな位の事業所が快く納品を受け入れてくれたということで報告は受けております。

○1番（田中道源君） 教えていただいて、ま、おそらくそれはその通りだと思いますので、実際は松崎ではそういう事情があって地元を優先してくださいよって形で断ったってことを聞いて良かったなあと思います。

で、実はそのですね、今の例で行きますとこの12日までで一旦締めると、要は今収束と言うんでしょうか、延長に延長を重ねてきましたけれどもその後増えてないものから、このまま行けば12日で締めるということなんですけれども、万が一またこの12日までの間に1人でも増えたら、また延長って事になるんだそうですけれどもその後のプランっていうのがゼロだということでした。いわゆる今受け入れているホテルさんも春休みということでお客さんが来ることになっていて、そんな時どうするんだろうねっていう話の中で一番最初にその3月、4月の入館状況を確認させていただいたことは、その場合に松崎町の方で良いよって言える事ができるのかなっていうのを確認したかったものですから聞きました。ですので、もちろん館長のことですから隣町のことものいろいろ気に掛けながら考えていることだと思いますけれどもわが町も優先の話ではございますけれども、隣町のことでも今困ってるよって事があるそうですからそこところ・・・たぶんこっちが困ったときには助けてくれると思いますので、困った時はお互い様だと思いますので・・・一応12日で締めるそうですけれども、万が一今日明日とかでまた・・・てなると延長になると、その後のプランてのが考えられてないそうですから、そんな時には一つこちらの方も検討してもいいんじゃないかあと思います。

じゃあ、長くなりましたんで終わります。

○企画観光課長（深澤準弥君） 今回西伊豆でコロナでました時にやはり一番最初に風評被害がひどいということで情報が入って参りました。その中で医療に関する方々は、それこそ大忙しの中自分の身を削ってそういう人たちをしっかりと見ていたということも情報が入ってます。うちの方で潤沢な施設がある訳ではないんですけれども、ある中でなんとか対応できるような形をしようという準備は一応してございます。今回まあみなさんテレビで見られていると思いますけれども、東日本10年の中で支援に入ったときにそれこそ廃校の学校に簡易ベットを載っけて・・・組み立ててそこから支援に行くといったようなことも僕ら町の職員とか県の職員も体験はしてるんですけれどもそういったよ

うな状況で良いのであれば、そういった形での廃校の利用とかそういう秋公共施設なんかを活用するという方法は一つの方法かなあとは思っております。できる範囲の中で最大限お互いの・・・近隣の町中でやることですのでできることは考えていきたいと思っております。

○議長（藤井 要君） ここで暫時休憩いたします。

（午後 3 時 1 8 分）

○議長（藤井 要君） 休憩前に引き続き、会議を開きます。質疑を続けます。

（午後 3 時 3 0

分）

○2 番（鈴木茂孝君） 町長にお聞きしたいんですが、2 月一か月間ですね接遇の対応の訓練と料理の開発っていうようなことを考えたっていうようなことをおっしゃってましたけれども、具体的にどのようなものが出てきたのか、どのような接遇の改善をしたのか、どのような料理のメニューが出てくるのか教えていただけますか。というのはですね、私先週末ですか星野リゾートの関係者の方とちょっとお会いしてお話をしました。その方は青森の星野リゾートの再生というかそういったことをやられた方で、例えばですね来られたときに青森弁で「よく来たなと」言えと、いう風に従業員の方に言ったそうです。で、従業員の方は「そんな恥ずかしいことは言えない」という風に言っていたそうですが、まあそのような形で地元の言葉を使っていくうちにやはり有名というか、その土地に来たっていう事を思うよってことでお客様も増えてきて、今ではかなりの繁盛店になっているのかと思いますし、また料理の話にしましても地元のを地元の生産者の顔の見えるものを作りたいんだと・・・使いたいんだってことで、今回ちょっと西伊豆の方へ新しくリゾートホテルその方がやるって言う事で私の方に見えたんですけども、そんな形の声がありました。やはり、接遇を変えるといいましても、どのように変えていくっていうことを答申としてはっきりしてませんと従業員の方もどうして良いかわかりませんし、料理も変えろといわれてもどのように変えるのか、地元のを使ってっていてもどのようなものをどのように料理するのかって事もやはり一緒になってやっていかないと中々見えてこないんじゃないかと思ひまして、どのような具体

例があるかお聞きしたくて教えていただけますか。

○町長（長嶋精一君） 町長が全てできるわけじゃないですけどね、あの・・・まず料理から言いますと、今鈴木議員が言ったようにできるだけ地元のを作って・・・地元のものを作ってね食材を作ってやるということによってあります。そして、例えば松崎は魚が捕れるんだけど・・・魚料理はもちろんやるんだけどね、その中にちょっとしたその洋風的なものも加えてやっていく、魚も刺身だけじゃなくてそういう風にあの・・・いろんな形のねイタリアンとかフレンチみたいな形で応用しながらやってくって事で話をしております。そしてこのコロナの前に、ちょうどあの洋食をやった経験がある人をね入社させまして・・・入社しまして、その彼がですねかなり新鮮なね今までのまつぎ荘と違ったような形で違う目線でもってね新しい料理を開発しております。それについてもずっと休みだったんですけどねまつぎ荘は、僕もたまに行って料理を味わっております。中々今までとは違ってきたなという風な受け取り方をしております。接遇については言ってみればあの・・・局長の方に話をするんですけどね、とにかくそのワンパターンのねどこでもやってる様な・・・今おっしゃったように・・・コンビニとかねそういうところのやり方じゃなくてあの・・・きっちりとしたマニュアル見たいのはいないんですけどね、あの・・・心のこもった挨拶ということをとにかく心がけると、その心のこもった挨拶というの今鈴木議員がおっしゃった方言でやるということも大きな心のこもった対応だなという風に思います。僕もその辺は非常に共鳴しますからね、そういうことは、青森弁とか秋田弁じゃないんだけど伊豆独特の言葉を使ってもいいもんでねとにかくマニュアル化しない対応をやるようにしております。以上です。

○2番（鈴木茂孝君） では、私もまつぎ荘に参りまして、その食事いただきたいと思っております。楽しみです。それからですね、その方と話してましてもう一点ちょっと教えていただいたことがありましたので、ちょっとお話ししたいと思うんですが、今ですねまつぎ荘ではどのくらいの方が夕食を召し上がっているかちょっとわかりましたら教えていただけますか。

○企画観光課長（深澤準弥君） 宿泊人数の中で・・・って事ですよ。ほぼ1泊2食というのが7割強になると思います。ビジネスで泊まる方っていうのが他にもおります、あとは何回かやっぱりピーターできていて地元の飲食店で食べたいって方もいらっしゃいますので、多くて1泊2食で大体申し込んで来られる方が・・・この10月11月な

んかは特に1泊2食で一番グレードの高い料理を申し込まれる方が多かったことを記憶してございます。

○2番（鈴木茂孝君） 実は観光庁ってのがありまして、そこは泊食分離というのを進めています。要するに宿泊と食を分けるということで、これはですね実は新しい需要の開拓にもなります・・新しい客層の開拓にもなります。そして松崎町というのは、食は実に豊とかおいしい飲食店がたくさんあるという風に私も思いますので、例えばまつぎき荘に泊まって夜は町内の飲食店を回ってもらう。このようなことをやりますと、実はですね顧客満足度が・・これは統計を取った訳ですけども・・向上したよというのが34.8%の宿が言ってます。それから、地域が活性化したよってというのは32.6%が言っています。それから連泊が増加したよは21.7%ということだからかなりの効果があるんじゃないかなという風に思っております。中々今厳しい折ですけども、逆に感染の危険がある飲食というのを他に外に任せてしまって、泊まるのだけをまつぎき荘でやるって形になっても新しい顧客の獲得もしくは、連泊することによってワーケーションの方が来るかもしれませんし、そのような新しい角度で見た誘客って言うのも考えてみれば、よりまた収益も上がるんじゃないかとおもいますけれどもその辺はいかがでしょうか。

○企画観光課長（深澤準弥君） まさにそのニーズがあるということで、このコロナ禍で熱海が一番最初にそれをやりました。何をしたかという、大きい旅館ホテルがやっぱり自分たちの食堂をいっぱいにしないために、スペース・・椅子を減らして、食の提供はできないけれど地域に出て夕食するパックとか、そういうのを飲食店と連携したという話を伺ってます。でそれは、2回目の緊急事態宣言の前くらいだったと思います。それはやっぱり今言ったようにお客さまの満足度も相当上がったということを受けております。うちの方も今おっしゃったとおり、町内に食を回す事によって宿泊だけでも増えていただけるとうちの方も食堂自体のスペースが限られるものですから、そういった形のものも是非取り入れていくということでは話をしてございます。先ほども申し上げましたとおり、とつぜん来る1人のお客様っていうのがいらっしゃるものですから、そういうケース特に夕食を無理にというよりはご案内するパターンの方が多いということで、一応まつぎき荘でも食事のできる場所のパンフレット等を用意して案内したりしてると言うことはし始めているので、今言ったように多様なニーズに対応できるスタイルを是非これからやっていってもらえればなあと私どもの方も考えてございま

す。

○2番（鈴木茂孝君） 今観光協会有志の方でしょうか、飲食店のPVを流してまして、私もフェイスブックなんかで見るとは思いますが、かなり完成度も高いのでそういうものともリンクしながら、こういう飲食店があるよというのをしながら、そしてまた、やっぱりそこまた食べに行こうというのをね思いながらまた松崎に来てもら得ることもあると思うんです。その辺を考えながら是非進めて言っていただきたいなと思います。お願いいたします。以上です。

○議長（藤井 要君） 他に・・・。

○7番（高柳孝博君） 私もあのメニューについてですけども、何回も申し上げている訳ですが、あの・・・ふるさと納税とセットにしてやる良いところだと思っています。宿泊と食もありますし、そういう意味では1点はいろんなイベントと組み合わせる、それは旅行業との絡みがあるということですから、旅行業者の方でふるさと納税とセットにさせていただいてそこにまつぎ荘を入れていただくということで試してやってみたら宿泊と他のイベントが組むって言うことができるんじゃないかと思っています。一回試していただきたいなと・・・それで成功すれば他の宿泊業の方々も同じようにふるさと納税のセットの中に入れていただいて、まつぎ荘だけではなくて松崎の中の宿泊業を展開するということも可能になるんじゃないかと・・・そこで実際試せるのがまつぎ荘だと思っていますので、一つ期待をしております。その考え方をちょっと・・・。

もう一つは、パッケージって考え方で申し上げているんですが、お客さん来たときに来たときだけの販売だけでなく、干物のは出してないから売れないって事ではなくて、干物ならお届けしますよということで、例えば月ごとに1月はこれ2月はこれ3月はこれと・・・あるいは季節によって春はこれ夏はこれというようなメニューを作っただけでそれらをお届けするって言うのも一つの手かなあと思います。あの・・・お米なんかだと届けていただいて助かったって言うのもありますしここですと・・・ま、いろんなイベントだけではなくて・・・イベントも一つの目玉として可能性がある訳です。トレイルランニングなんかは、それなかったらいれてもらって参加って言うのが入ってくるとかいろいろやっていますので、それらとセットにして付加価値をつけて泊まっていたら・・・それが一回試験的にできれば、町の方の業者の方も使える・・・あんまりまつぎ荘だけでやっていると公営企業で圧迫するというのがでてきますので・・・ただ試験的に

やるのはまさにあの・・・町がやれるのは公営企業でやるのが一番やりやすい訳ですので是非試験もしていただきたいなと思う訳ですがその辺り考え方がいかがでしょうか。

○企画観光課長（深澤準弥君） 町の方としてふるさと納税の推進という中では、いろんな方に働きかけをさせていただいて、まつぎ荘の方も宿泊券等をやってもらったり、雲見観光協会でも宿泊券等やってます。基本的に原則松崎町から指定管理を出してるものですから、振興公社側から、例えばふるさと納税こういうものができたよという形で、言ってきていただければ、うちは全然オープンになっていますし、さっき言った民間の方の提案っていうのも一応受け入れる体制はすべてできてます。さっき言った旅行のパッケージについても旅行業を持ってる業者さんにも何かそういった体験もののツアーパックをふるさと納税でどうだと言うことも一応うちの方から働きかけをさせていただいているんですけども、中々その後が他の事業等々の絡みの中でかわからないんですが、出てきてないのが現状です。ただそこを諦める事無くです継続してやはり今この時代・・・流れの中で、それこそないだ伊豆バスがワーケーションをトライしましたけれども・・・ツアーをですね・・・結果的には中々集まらなくて苦心したって事を伺ってます。そういったことも含めて、やっぱりいろんな形で言ってきていただくのが一番よろしいかと思っておりますし、指定管理を一応出して受けているところにはいろんな提案意見は言えるんですけども、強制は中々できないところでございまして、企画観光課で運営しているって事ではないところがあるものですから、やはりそちらから・・・振興公社側からですねいろいろな提案を出してきていただいて、それを受け入れるという形であればいくらでもできますので、また、その辺また公社の方にも働きかけをさせていただくつもりでおります。

○議長（藤井 要君） 他に・・・。

○7番（高柳孝博君） ま、振興公社にといいながらも、町の方の振興という意味では企画観光が全く無縁ではない訳ですので、企画の方でできればこういうのがあるけどどうだって事で持ちかけてもいいと思うんですね。ま、振興公社の方もかなり難しいところもあるかもしれないけれど実際には町長が・・・トップは町長ですので町の方で提案していったトータル的に町がよくなるというのは企画観光の方もこれは本当に考えてやぶさかでないという風に思う訳です。そういう意味で企画観光の方で新たな・・・ふるさと納税自体は企画観光の方でやってる訳ですよ、ふるさと納税にかませて・・・なぜふるさ

と納税にかませるかって言うのとふるさと納税があのだ・・納税する方の人の減税にもなりますし町の増税に・・増収になる訳ですよ。町の増収になると同時に町の事業喚起になるとこれは非常に良いことで、それをやっぱり何も企画しないでやってると今まで通りになってしまう。だから新たなものをやるという意味では、まつぎき荘なんかも商品のメニューとして入れてくつと言うのはやりやすいんでは無いかと・・だってトップは同じなんですから・・やりやすいんではないかと思うんですがその辺りの考え方がかでしょうか。

○企画観光課長（深澤準弥君） 指定管理委託の法律上、やっぱ指定管理を委託業務を受けているところに、こちらで指導というか提案はできますけれどもやるかやらないかの部分については、こちらでプレッシャーを掛けるかけることぐらいまでしかできませんので、そこはやはり振興公社側で、ある程度判断をしていただく形になると思います。現場の方でできるできないの判断が出てくると思いますけれども、その部分で実はふるさと納税についてももう何年も前から提案はさせていただいておりますが、中々対応ができないようなお答えをいただいております。まつぎき荘が一番やりやすいって事で言うと確かに僕らとしても、企画観光課としても言いやすいので、こういうことできないかああいうことできないかは常々意見はさせていただいております。ただふるさと納税についても、やはり官公署だけではなく民間の方への波及効果あるものですから、民間の事業の支援という形にもなりますもので、そっちの方もこういうことできないかと言うこともまつぎき荘に限らずですねいろいろところで働きかけはしているところでございます。ただ前回もお話したとおり、対応できるできないの関係もございまして、ご本人のそっちよりも大事な商売の方があると言うような意見も伺ったりするものですから、中々その辺がこう伝わりにくいと思っておりますが、諦めずに続けているんな提案とか是非協力していただきたいと言うようなことの働きかけはし続けていく所存でございます。

○7番（高柳孝博君） 振興公社は全然ダメだと言うことになるとここに振興公社の方に来ていただいて聞かないと実際の意見を聞かないと・・私たちはここに今提案されてきたと言うことは企画観光も承知していて振興公社も状態のように動けるといいう風に感じて質問掛けている訳でございます。そこで振興公社は別であるって事となると振興公社の方に来ていただいて振興公社がそれなりに考えていることとかなんかを聞かなき

やならなくなってしまうのでその辺りはしっかりと振興公社の意思を反映できるような事をお願いしたいんですがその辺りいかがでしょうか。

○企画観光課長（深澤準弥君） 指定管理の関係今言っていることなんですけれども、私ども・今言ったように町長が理事長でうちのトップでもありますので、確かにたまたま同じ同じ形ですし管理委託を出している方として町が出しています。指定管理を出す一つの方法として業務を委託するって言う形なぜ委託するかって言いますと、やはりこっちで持ちきれない部分をやはりこの振興の部分でやっていただくといういわゆるアウトソーシングになるんですけれども、その部分で監督官庁は役場・町長がトップでいらっしゃいますんで町長にいろんな話は当然報告は来てますので一緒に振興を図ると言うことで振興公社の事務局長とも話しはしているところです。ただ先ほども申しあげましたとおり、僕らもいろいろな提案はしてはいるんですけれども、口は出すけど手は出せない状況っていうのは実際にある状況でございます。僕らが働きに行って、振興公社で・まつぎき荘でなんかするって訳には法律上ちょっと難しいところがございますので、その部分はやはりあの提案をしてその中で現場でしっかりとできることを出していただくというのが振興公社の役割だと思っておりますので、これからも・言ったけどやらないってのですすむのは決して良くないと感じておりますので、今高柳儀委員がおっしゃったような形でその本人達が何でだって話になれば、イヤ対応ができないんです・みたいな話にはなるかと思っておりますのでそこは受けてこちらで話しているような状況ですので、ただできないことをそのままにすることはできませんので随時努力をさせながら自分たちも何かもっと負担のない中でやることを提案していく様な形にはできるかと思っておりますので、今後もいろいろと改善を考えながら納税額を増やすと言うことは、本当に切実な町としてはおもいでありますのでまた、今後もいろいろなご意見等いただければと思います。

○議長（藤井 要君） 他に質疑はありませんか。

○議長（藤井 要君） 質疑が無いようでありますので、この辺で質疑を終了したいと思います。ですがこれに後異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（藤井 要君） 異議なしと認めます。よって質疑を終結いたします。

これより討論に入ります。

まず、本案に対する反対討論の発言を許します。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○議長(藤井 要君) 反対討論なしと認めます。

次に、本案に対する賛成討論の発言を許します。

(「なし」と呼ぶ者あり)

○議長(藤井 要君) 賛成討論なしと認めます。

○議長(藤井 要君) これをもって討論を終了します。

これより、議議案第20号 令和3年度松崎町営宿泊施設「伊豆まつぎ荘」事業会計予算についての件を挙手により採決します。

本案は原案のとおり決することに賛成の諸君の挙手を求めます。

(挙手全員)

○議長(藤井 要君) 挙手全員であります。

よって本案は原案のとおり可決されました。
